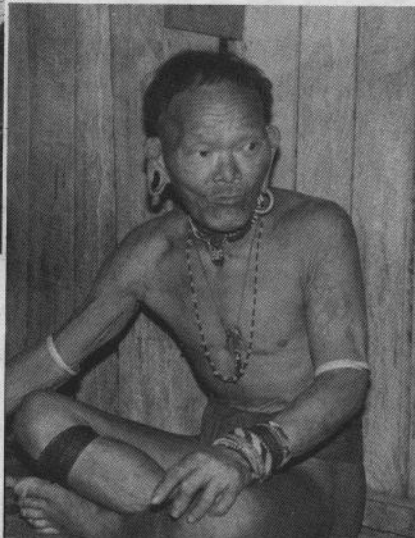


Trial & Error *No.103*

トリアル・アンド・エラー

試 行 錯 誤



特集 第三世界と日本の地域

第三世界と日本の地域	3
地域開発とODA を貫くもの	6
NVC の理想と現実	8
常民大学実践報告	10
遠野との出会い	12
アグロフォレストリーに見る 日本の森, アジアの森	14
私がJVCでみつけたもの	16
エチオピア緊急報告 内戦の拡大とプロジェクトの中断	18
JVCにゆうす	19
小さな地球・大きな環境問題 第3回	20

第三世界に身近な地方の問題

少し前のこと、第三世界の問題にかかわる人たちに対し、「日本にもいっぱい問題があるのに、どうしてそれらにかかわろうとしないのか。先にそちらをやるべきだ」という声をよく聞いた。以前はそう考える人もいるのかと、「世の中にはいろいろな問題があるのだから、それに気づいた人が、関心を持った人がそれぞれかかわればいいのではないか」と答えてきた。

しかし今、それらの問題は類似し、またお互い密接に関係していることに気づく。人も物も金も東京に集中し、地方に対する東京の影響力は拡大の一途をたどっている。地方への補助金は焼け石に水。地域の再生をめざし、リゾート地として生き残ることに望みをかける。しかし潤うのは一部の地元有力者と開発に参加する企業だけだ。ODAのしくみとなんと似ていることか。

熱帯林の破壊が問題になっているが、私たちは南の森を切りつくす一方で、自分の国の森を荒れ放題にしてきた。日本の森の木々を大切に育てて使うことができれば、南の森を破壊させずにすんだかもしれない。

北の国々と第三世界、日本の中央と地方、これらの従属関係は経済の発展を追求する限り続くのだろうか。しかし、それとは別のものに価値を見いだそうとしている人が、第三世界にも日本の中にもいる。今回の特集の編集長を引き受けた谷山は、以下のメモを残しラオスに向かった。

「第三世界にかかわっていると、第三世界の視点から、今までに考えられなかったような新しい考え方ができるようになります。日本の福祉制度も公教育も、行政サービスすらも、管理社会を補強して人間の自由を拘束する側面があることに目が開かれます。

同じように、今まで意識もしてなかった日本の地方の問題が、実に身近な、しかも明日の世界にかかわるような重要な問題として迫ってきます。地方にふんばって生きぬいていこうとする人たちは、第三世界の人々の生きるための闘いを、私たち以上に実感して理解できるのではないかという希望もあります。

ともかく、第三世界と地方との関係の問題は、私たちの活動によって無視することのできない課題です」。(ま)

〈表紙写真〉森で生活する人の知らないところで森が破壊されていく

上 ジャングルに開かれた伐採道路

中 狩猟生活をするブナン人

下 志武志湾沖の石油備蓄タンク(熊本一規)

第三世界と日本の地域

かかえる問題の共通点

谷山博史

近代化の波と闘う

年中東京で仕事をしなければならぬ東京事務所スタッフが、アジアやアフリカの現場に出張に行って帰って来たときの表情は明るい。日焼けした肌や屈託のない笑顔もさることながら、行動に移ろうと躊躇うずしている闘志が、周囲の者を励まさずにはおかない。

第三世界の現場で私たちが得るものは、正しくこの私たちを元気にする何物かである。社会の底辺に住む人々の生きるためのぎりぎりの生活、その生活と生活の場を守るための日々の闘い、そしてそんな中にあっても失わない人間の暖かさ、気の利いた心遣い、そして明るさ。社会の底辺に住み、今ある生活環境を守って生きる彼らは、力ある者から収奪されることはあっても、他人を踏み付けにすることはない。こういう人たちの生活を守る闘いに参加し、努力を共にすること自体が今の世界では近代文明に対する批判を含んでいる。なぜなら私たちが活動している現場の住人は皆、近代化の波に翻弄されながらも、それに抵抗して自分たちの生活の場を守り、よりよい生活を作り出そうとしている人たちだからである。彼らと活動を共にするとき、私たちも歴史を変える力の底流に参加している実感がもてる。

近代化の波に抵抗して、人間らしい生活の場を守ろうとしているのは、なにもアジアやアフリカの住民ばかりではない。日本の中にも開発という名で押し寄せてくる近代化に対して、先祖代々受け継いできた自然環境と伝統文化を守ろうとしている人たちがいる。彼らに共通していえることは、経済的合理性、物質的豊かさといった画一的な価値観ではなく、自分たちの地域の独自性に根ざした幸せ感を何よりも大切にしようとしていることである。魚湧く白保の海を守ろうとする石垣島の人たちと、生活に必要なすべてを提供してくれる森を守ろうとするサラワクのプナンの人々には、それぞれ近代的な意味での便

利さとか物質的豊かさとは違った豊かさについての見識がある。だから、政府や業者が開発によってもたらされる快適さを餌に空港建設や森林伐採を進めようとしても、住民はそれに騙される愚を犯すことはない。

JVCの活動は、第三世界の底辺の、特に困難な状況にある人々に協力し、彼らがその困難な状況をもたらした外部からの影響を跳ね除けて生きぬく方法を確立するためのものである。現在の活動地であるエチオピアにしても、タイやカンボジアやラオスにしても、環境破壊や戦争など近代化の過程で生じた負債を負わされたがために貧しくなった、あるいは一層貧しくなろうとしている地域である。

中央に支配される地方

現代の世界は金の量と情報の量が一元的に、国と国、地域と地域の力関係を決定してしまう。産業革命まで遡らなくても、ほんの半世紀以前は離れたふたつの地域を結ぶ交通・通信手段も、植民地という手段をとらずに一方が一方を収奪することを正当化する世界システムも確立していなかった。現在は、先進国及び国内の大都市がそれぞれ第三世界諸国や国内の地方に対して一方的に情報を渡したり、後者の持つ資源を利用することができる。逆に第三世界や国内の地方は先進国や国内の大都市からくる情報、あるいは文化の型を積極的に受け入れ、この情報、文化の型に沿った先進国型・大都市型の発展と生活スタイルを真似ようとする。開発という名の収奪は、このように文化や価値観の画一化が土台になって初めて可能になる。

最近ラオスから帰ってきたあるスタッフが、ラオスの近代化にともなう人心の変化について言っていた。「あれだけテレビで『文化的生活』を見せつけられれば、家の周りの木を伐ってでもバイクや車が欲しくなっちゃいますよ」。しかし一方鹿児島県志

府志の開發に反対した住民のように、「スモッグの下でのビフテキより青空の下での梅干しを」といって押しつけられる便利さよりも、地域環境に根ざした生活文化を大切にしようとする人たちもいる。開發や近代化に対する地域住民の反応のし方がさまざまであることは、第三世界だろうと日本の地方だろうと変わらないが、開發が地元政府と日本の中央の政治家、業者、役人の利権漁りの構造のなかで進められることもまた、国の内外を問わず事実である。この点については熊本氏の論文を参照されたい。

ところで日本の地方と第三世界には、いくつかの両者に共通の問題を設定することができる。

1. 公共事業とODA
2. リゾート開発と環境破壊
3. 廃棄物処理と公害の移転
4. 中央-地方、先進国-第三世界の経済の系列化、文化の画一化と地域の伝統の衰退

これらの問題は第三世界と地方の至るところに存在している。しかしここでは、最近問題の類似性から特に注目されるようになったふたつの問題に触れてみたい。

地元民を無視したリゾート開発

「日本人による日本人のための観光開発。もうけた金は日本人が持っていってしまう。グアム人がコントロールできない所で、われわれの自然や生活が壊されてしまうのはもうまっぴらだ」。今年7月に朝日新聞で8回にわたって連載された「観光誘致のかけで」という特集で紹介された、グアム島地元民の日本人による観光開発に対することばである。そもそも地元の住民が長年住み慣れ、利用してきた自然環境と自然の資源を、よそ者である日本の業者が地元政府の観光誘致促進策に応える形で囲いこんで開発する。その結果、その地域に住んでいた住民の立退き、ホテルの汚水による川や海の汚染、ゴルフ場建設のための森林伐採と農薬汚染などに反対する住民と、政府や業者が対立する例が頻繁に起こっている。観光開発という形での大手不動産会社や観光関連業者によるアジア太平洋地域への進出が、ここ2・3年ブームになっている背景には、日本企業の金余り現象や、不動産への投機熱が国外にまで及んだことや、受け入れ国政府にとって観光産業が最も手取りばやい外貨獲得の手段であり、今後の成長産業であると見込んだためといわれる。1987年のタイ、昨年のフィリピン、今年のマレーシア、来年のイン

ドネシアと東南アジア諸国の観光年が続き、これにあわせて各国政府はマレーシアの投資促進法に見られるような数々の投資優遇処置や開発規制の緩和によって、日本の業者による投資を当て込んだ観光誘致を行っている。この各国政府と日本の業者の結びつきを促進しているのが、ODAによる観光開発に対する援助であることもまた事実である。

一方これと似た現象が日本でも至る所で起こっているのはだれの目にも明らかである。1987年に制定された総合保養地整備法（リゾート法）が国内の観光開発ブームに火をつけた。この法律は、第三セクター方式による地方公共団体と企業の合弁事業という公共事業的性格を持たせることによって開発規制を緩和し、辛うじて開発の手を免れていた国立公園や国定公園、保安林や農地を、ゴルフ場、スキー場、テニスコート、マリーナ、ホテルに変えていこうというものである。この法律が日本各地でリゾート開発ブームまでまき起していることの背景には、日本の企業によるアジア・太平洋地域での観光開発と同様、東京の金余りの下での土地投機熱があるといわれる。と同時に、過疎に悩む地方が雇用創出や経済的波及効果をリゾート開発に期待せざるを得ない事情がある。しかし実のところ、山を伐り田を潰してゴルフ場やスキー場を造ったところで、利用するのは都市の一部の人間で、期待する雇用創出や経済的波及効果はほとんど望めないばかりか、森林伐採などで自然の生態系が崩れ、水源が枯れたり、山が保水力を失って鉄砲水を引き起こしたりするほか、ゴルフ場の農薬によって地域住民の健康までが脅かされている。



いたる所でゴルフ場建設が進む 撮影/熊本一規

さらにここで強調したいことは、地方であれ第三世界であれ、リゾート開発というものが、都市あるいは先進国の人間の趣向におもねた自然環境の作り変えであるということである。地域の自然環境に適応しながら生活のパターンと伝統文化を作り上げてきた住民にとって、リゾート開発を受け入れることは、よそ者の文化に迎合することでさえある。畳の部屋に土足で上がり込んできた者に合わせて、自分も土足で生活し始めるようなものである。東南アジア各地で起こっている日本人による観光開発への反発の交差的背景を日本人はもっと理解する必要がある。もちろん日本の地方でのリゾート開発に対する反対運動にもそのような精神的な背景があるはずである。逆にいえば、地域の住民が地域の歴史や伝統を見据えることが、大都市や先進国の業者・政治家・官僚と一部の地元有力者だけが得をする開発の構造のなかで、地域主体の地域らしい発展のありかたへの回答につながるのではないだろうか。

新しい生き方を求めて

私たちはアジアやアフリカに行くとき、その地域地域の自分たちの生活を守る闘いの中で、近代化や現代文明に対して待ったをかけている人たちに会おう。西洋流の物質文明でどんどん地球上を開発していったら、ちっぽけな自分たちの生活もダメになるけれど、地球そのものも長くはないよ、と体をはって警告し、かつ地域環境に適応した生活のパターンを、押し寄せる近代化の波の中で作り直そうとしているのである。その中でも私たちに最も親しい人たちが東北タイのプーヤイ・パーイ村長であり、エチオピア、マーシャ村の農民であり、サラワクのブナン族であり、JVCプロジェクト地のすべての人たちである。

同じように日本の地方にも、大都市に迎合するのではない別の地域の発展を模策して頑張っている人たちがいる。今回原稿を寄せて下さった、岩手県遠野の小井口さんたちもそういう人たちである。またJVCが遠野ユネスコ協会と共催で「ラオス舞踊の夕べ」と「ラオス織物展」をやった際、遠野で「常民大学」という勉強会を主宰し、柳田国男の遠野物語を通して遠野の歴史を学びながら、遠野の遠野らしい発展のありかたを考えて行こうとする人たちに会った。小井口さんは私たちの活動とはまったく関係がないのに、プーヤイ・パーイの話をきいて「自分たちの地域作りとまったく同じです」と喝破した



集会場に集まる小野田町の人々

人である。小井口さんに言わせると、遠野物語を売り物にした都会人目当てのお祭騒ぎの観光ではなくて、遠野の歴史と個性に根ざした発展のあり方を、子孫にまで引き継いでもらうことが自分たちの役目だという。

仙台市近郊の小野田町を訪ねたときも、若者たちが都会指向の発展ではない、土着的な発展の在り方を模索しているのに出会った。小野田町は近くに日本で残された数少ないブナの原生林の船形山を抱えていて、近隣の町の人たちとともに「船形山のブナを守る会」を作っている。この地域の自然を守る運動を通じて熱帯林の問題に出会い、熱帯林の保護運動へも関心を高めている。また、消費生活をシンプルにするため牛乳パックの利用法を考えたり、自分たちが食べていくための有機農業を実践したりしている。みんなで集会場に集まるたびに、スキー場建設の計画に対抗する地域活性化のためのプランを議論しあっている。その中心人物の一人である遠藤みどりさんは言っていた。「代々受け継いできたこんなにすばらしい自然があるのに、このうえにいったい何が欲しいというの」。この町でも私はJVCがアジアやアフリカでやっていることを講演したが、話がつきず場所を変えて朝3時まで若者たちと議論が続いた。さらに話を聞きにきていた隣の鹿間町に住む大内さんからは、自分たちの農村の問題をアジアの問題とダブらせて考えたいから講演に来てくれるようにとの誘いがあった。

ひとつひとつの運動は小さいけれども、日本の中でこういう人たちの運動を、すでに私たちが繋がっている新潟や山形や愛媛の運動とともに第三世界の運動と繋げていくことなしには、物質文明、近代化一辺倒の時流のなかで、アジア・アフリカの小さな民の生活を守っていくことはできないであろう。それは言うまでもなく、人類そのものが生き残っていく術を失うことを意味する。

地域開発とODAを貫くもの

明治学院大学助教授 熊本一規

鹿児島県大隅半島の北東部、宮崎県との県境近くに志布志湾という湾がある。湾奥の延々16キロメートルにおよぶ白浜青松は日本で最大の規模を誇るといわれ、日南海岸国定公園に指定されている。

1969年、国の新全国総合開発計画は、大規模工業基地の候補地として、苫小牧東部、むつ小川原、秋田湾、西瀬戸とともに志布志湾を選定した。それを受けて1971年、鹿児島県は新大隅開発計画を策定した。白砂青松の沿岸部のほとんどを埋め立てて2730ヘクタールもの埋立地を造成し、石油精製・石油化学・造船などを立地するという計画であった。

以来20年余、現在、湾の南端部に196ヘクタールの島が造成され、国家石油備蓄のタンクが建設されようとしている。しかし、鹿児島県は、今年になって新大隅開発計画の終結を宣言した。計画は20年余を経て、当初計画の7%程度の面積に縮小し、白砂青松のほとんどは開発の手から守られた。

筆者は、1976年以来、新大隅開発計画に反対する住民運動に関わってきた。また、同様の埋立計画をかかえる山口県上ノ関（反原発運動）、石垣島白保（反空港運動）、佐賀県唐津（反埋立運動）等で勉強会等を持ってきた。以下、反開発運動の経験から、国内の地域開発の問題点とODAの問題点とを比較考察してみよう。

土着文化と拡張文化

石垣島白保の海岸では、白保のオバア（石垣島では成年女性のことを「オバア」という。「お婆」の意ではない）たちがアオサやモズク等の海草や貝類を採っている光景を日常的に見ることができる。引潮時、サンゴ礁の上は水深が浅くなり、オバアたちは、漁船や漁具を必要とせず、採貝・採草ができるのだ。この採貝・採草によって一家の生計を支えてきたオバアも少なくない。何ら資本を必要とせず、あたかも自分達の庭のような沿岸海域で、容易にできる採貝・採草はオバアたちの生活そのものであり、その生活を続けたいとの想いがオバアたちの反空港運動の原動力となっている。

志布志湾でも、冬の間ノボリコ（ウナギの稚魚）採りがさかんだった。満潮を利用して川を遡上してくる

ノボリコを網ですくうのだ。頭につけたカンテラで水面を照らすとノボリコが灯りに寄ってくる。それをすばやく網ですくう。河岸にカンテラの灯が点々と連なる夜景は志布志湾の風物詩だ。

志布志湾のクロマツ林では松葉採取がさかんだった。地面に落ちた松葉をかき集め、燃料としたり、農家に肥料として売ったりする。土地が肥えてくるとマツよりも照葉樹の方が強くなっていくはずで、松葉採取のおかげでクロマツ林も安定した姿を保ち続けることができていた。

白保の採貝・採草、志布志湾のノボリコ採りや松葉採取に象徴される生活や生産は、自然のリズムに従い、資本やエネルギーを必要とせず、老若男女の誰にでも容易にでき、生態系を破壊しない。土地や海や河など地域の資源が地域住民の手によって管理・利用される。資源を枯渇させると自分達やその子孫にはね返ってくるので資源も保全され、あるいは再生産されていく。地域の資源を基盤としているから急速な経済成長はみられず、また人々もそれを求めはしない。このような生活様式及びそれに照応した人々の価値観を「土着文化」と呼ぶことにしよう。

他方、開発によって実現する生活や生産は、自然と隔絶し、資本やエネルギーを大量に要し、高齢者・病弱者は排除されて強壮な者にのみ適合し、生態系に対して破壊的である。地域の資源は地域住民の手を離れて大資本や公の機関によって管理・利用される。資源を枯渇させても、また他所へ移って生産をすればいいから、資源の保全・再生産は考慮されず、枯渇へと向かっていく。地域の資源に制約されないから急速な経済成長が可能であり、人々もそれを志向し、果てしなく生産を拡張していく。土着文化に対して「拡張文化」とでも呼ぶことができる。

両者は全く異質の文化である。異質であるがゆえに、どちらが秀れどちらが劣っているとはいえないはずである。それぞれの文化を好む者がその文化圏の中で生きていけばいいだけのことである。

ところが拡張文化は、果てしなく生産拡大を志向するため、やはり果てしなくその圏域を拡大せざるを得ない。ひとつは、資源の供給源確保のため。もうひとつは、製品の市場拡大のため。拡張文化の圏

域が拡大するためには、土着文化の地域を拡張文化に変え、圏域内に統合しなければならない。

そのために生れたのが開発のイデオロギーである。拡張文化の方が土着文化より生産性が高いがゆえに秀れているとされ、土着文化から拡張文化へと変わることが発展とされ、拡張文化への変化が開発の名によって押しつけられてきた。

志布志湾の住民は、新大隅開発計画に対して「スモッグの下でのピフテキよりも青空の下での梅干しを」と言った。沖縄県金武湾の住民は、CTS 建設計画に対し「母なる海を守る」と言った。反開発の住民運動は、拡張文化の圏域に統合されようとすることに對する、土着文化に生き、それを愛する者からの異議申し立てである。

マレーシア・サラワク州における森林伐採が問題となっている。熱帯林が伐採され、日本のODAによって整備された林道を運ばれて、その約60%が日本に輸入される。この森林伐採によって、森林に棲むプナン族の狩猟採集生活が脅かされている。これもまた、日本の拡張文化がプナン族の土着文化を統合しようとしているのであり、その構造は国内の地域開発の構造と全く同一である。

利権の構造

志布志の国家石油備蓄基地の事業費は約2000億円。その事業主体は、有力政治家二階堂進の「天の声」（南日本新聞）によって決まったといわれている。埋立地の盛土用の山も、登記上の所有者はダミーで真の所有者は二階堂と言われており、地元では「ロッキード山」と呼ばれている。志布志に限らず、公共事業や電源開発事業では、事業費の一割が政治家に献金されるという。

政治家や企業ばかりではない。唐津の佐志浜埋立計画は、マイナス12メートル岸壁造成に伴う浚渫土砂の捨場作りのために浮上した。マイナス12メートル岸壁は国際観光船の入港に新たに必要というのだが、すでに唐津港にはマイナス12メートル岸壁が備わっており、年間7隻しか利用されていない。このような無駄な事業が計画されるのは、唐津港にある運輸省第四港湾建設局の出先機関が、自分達の職場の維持拡大及び予算獲得（浚渫事業は運輸省の直轄事業として行われる）を企てたためである。

政治家・企業・官僚の利権が表に出ないよう、公共事業は必ず地元の要請ないし地元の同意という体裁をとる。だが、そこでの「地元」とは、知事ない

し市町村長、あるいはせいぜい議会の議決であり、決して住民投票による民意ではない。「地元」の意思表示は、その多くがやはり利権にあずかる政治家によって行われ、土着文化に生きる人々の声は全く反映されることはない。

ODAは、地元（政府）の要請によって行われるが、内実は、日本の政治家・企業・官僚の利権の温床であり、地元でも有力政治家を潤すと批判される。その利権の構造もまた、国内の公共事業のそれと全く同一である。

国内と世界の南北問題

以上のように、ODAの問題点と国内の地域開発の問題点は全く同一である。それは、国内の地域開発に用いられてきた手法がそのままODAに適用されているからである。現在ODAによって外国の土着文化圏の人々が苦しめられているのと同様に、地域開発によって国内の土着文化圏の人々が苦しめられてきたし、現に苦しめられているのである。

地域開発は、必ずといってよいほど「地域格差の是正」をその目的に掲げるが、それが実現したためしはない。むしろ逆に地域格差を拡げてばかりきた。それは、地方の土着文化を破壊し、拡張文化に統合してきたからである。中央の繁栄と地方の疲弊。それは国内の南北問題とも呼べる構造である。いままた、リゾート法によって、かろうじて残ってきた土着文化の多くが拡張文化に統合されようとしている。

国内の南北問題と世界の南北問題の根は同一であり、前者の解決は後者の解決につながり、後者の解決は前者の解決につながる。国内の林業を復興させれば外材の需要は減少し外国の土着文化が守られ外材の輸入が減少すれば国内の林業が振興し国内の土着文化が守られる。

白保の採貝・採草、志布志湾のノボリコ採りや松葉採取。これらは、実は近世以来ムラ（旧村）という生活共同体によって管理されてきている営為である。これらの営為が、資源枯渇をもたらすことなく300年余りにもわたって続けられてきていることは、地域の資源が地域に根ざし、子々孫々にわたって住もうとする土着文化の地域住民によって管理されてこそ永続することを物語っている。

拡張文化が地球を破壊しつつあることが明らかとなりつつある。地域住民による地域資源の管理及び土着文化を強めていくことこそが、南北問題及び地球環境問題の解決の鍵である。

NVCの理想と現実

新潟国際ボランティアセンター 多賀秀敏

新潟国際ボランティアセンター(NVC)は、1990年3月31日、新潟市内の坂井輪公民館で産声をあげた。NVCとしたのは、将来大きくなったときのために、「日本」のNを先取りしておこうと思ったからである。

ことの起こりは、数年前にさかのぼる。カオイダン、サイト2のキャンプを訪問したあと、アランヤプラテートから、オレンジ色のバスに揺られてバンコクをめざした。幸か不幸か、ラオス難民のことで頭が一杯の谷山博史氏が旅の道連れである。

「こちらのキャンプで訓練した技術や知識は本当に本国に帰ったあと役にたっているのだろうか、いつも疑問に思っている」と谷山氏。「そんなに心配だったら、ラオスに入って行って、調査をしたり、難民を出さない国づくりに協力したらよい」と私。

二人の約5時間にわたる会話をまとめるとこのようになる。

それから、1、2年後。谷山氏から電話が入る。「今度そちらへ伺って、JVCのことや、ラオスプロジェクトのことをお話したいんだけど、いいかなあ」

かれは新潟大学法学部国際関係論の講義でゲストスピーカーとして90分間熱弁をふるった。ラオスでは、栄養や衛生の知識の不足などから、もっともひどい所では幼児死亡率が3人に1人に近いこと。人間関係が豊かにゆったりと展開されていること。JVCが、国連の機関やラオス婦人同盟と協力して、農村生活改善プロジェクトを開始したこと。それは望まれていたプロジェクトであり、賛同すれば支援できること等々である。

第1回愛の掛け橋バザー

講義には、聴講生として新潟市議会議員の佐藤幸雄さんが出席していた。「わたしは、若いころ船にのって東南アジアをまわった経験があります。アジアの同胞が困っているときに黙っているわけにはいきません。先生、新潟でバザーをやって、われわれの心をとどけましょう」

この議員さんは、おしりにジェットエンジンを背



初めてのバザーは市民の関心呼んだ

負ったブルドーザーのような人だった。超党派で新潟市の市議会議員全員に呼び掛け、市長以下主だった市の幹部に話をし、果ては、市庁舎の館内放送を使って、またたくまに山ほどバザー商品を集めた。かれは3人の子持ちである。かれの奥さんの栄子さんは、一番下の子をおぶいながら値段つけを担当した。「いつか子供と一緒にラオスに行くのが夢です」と語る。

呼び掛けにこたえたのは、市の職員ばかりではない。個人的に商品を持ってくる人もあれば、新潟県中小企業家同友会、青年会議所、新潟交通など多数の企業ぐるみ団体ぐるみの協力者も現れた。マスコミも好意的で、JVCから駆けつけてくれた鈴木由子さんがテレビ出演して宣伝に務めた。

商品は、家庭で眠っている贈答品などで使われずに「朽ちていく新品」に、もう一度命を与えるという趣旨で集めた。ある意味での「リサイクル」も兼ねたのだ。

1989年の11月9日、10日に開催したバザーでの売上は214万円あまり。当初、谷山氏に約束した100万円を1万ドル(143万円)に上方修正した。この勢いのによって、JVCカレンダーは、約850部売りあげた。

NVCの誕生

バザーが新潟に与えた影響は、地球のためになにかしたいと普段から思っていた人々がパイプをつかんだことだった。バザー商品をお願いに行き、「ラオスう?!!」と言う人々に、事情を説明して断ら

れた記憶はない。こういうことがやりたかった矢先だという人すらいた。地方こそ農村改善のようなプロジェクトは理解できるんだという人もいた。戦後同じことをやったノウハウが残っていると自慢する人もいる。

そうした時に必ずと言っていいほど、「継続的にやらなければ意味がありません。組織化しなさい」という助言を受けた。「では」と軽いノリで誕生したのがNVCである。

目を輸出して心を輸入する

NVCの狙いは、地域の真の国際化のための「すきま産業」である。新潟におけるこの分野のすきまは、「こちらから打って出る姿勢」の欠如だ。あちらから来た人々に対しては、新潟はどこにも負けないホスピタリティを発揮する。どこからともなくふって涌いた「イベント」は真面目にやりとおす。こちらから出掛けて行ったり、主体になって呼んでみたりということは、少ない。

そのために、「新潟発ラオス行：心の輸出」は続ける。最低でも5年から10年。目標は毎年100万円。その行方はしつこく追及する。時には、人を派遣してでも、有効に使われたか否かチェックする。今年の6月、第2回バザーが行われ、約180万円の売上。これがNVCの第1の目的。

人の目を輸出して現地の心を輸入したい。国際政治経済の構造から言えば、先進国の中央と第三世界の中央とは利害が一致する。それぞれの中央と地方とは、地方にとって痛しかゆしという関係でつかずはなれずである。そして、地方と地方とは利害が一致しない。先進国の地方が中央に支配されながら、第三世界の地方から甘い汁を吸っている事実があるからである。

この関係は、遮断されているために余計見えにくい構造になっている。ならば、直接向かい合ってしまえ、スタディツアーだ！研修旅行だ！過激なバックツアーだ！アジアの底流でうごめいている変化を自分の目で耳で体で、直接顔と顔を向き合って感じてこねばだめだ！この短絡的な発想が第2の目的。

そして、この夏。「選り抜かれた」20名の目が、輸出された。タイでは、クロントイ、パナニコム、カオイダンを訪れ、シンガポールでは、「からゆきさん」墓地、晩晴園、歴史博物館、人民協会、コミュニティセンターと、片時もメモ帳を離さず、質問に答える人がへき易するほどの熱心さで“スタディ”

した。今秋、ラオスへ第2回スタディツアーを打ち出す計画が、ひそかにねられている。

まず、新潟を良い所に

地球に住みやすい、住むに値する惑星にすることが、真の国際化である。「援助」して、よそをよくするなどおこがましい。まずは、新潟を良い所にしていかなければ何にもならない。このために間断なくスタディフォーラムを開催して、意識変革に努める。「県内の青少年、成人男女」（何のことはない、新潟に住む人間すべてだ）を「育成する」。その結果、実際に、国際ボランティアとして県民を送り出す。第3と第4の目的である。

NVC総会、ミニ集会、お茶の間勉強会、スタディツアー報告会とにぎやかにくりひろげつつある。たとえば、ツアーのメンバーだけでも、目に耳にした限りで、帰国後3週間たらずの現在、テレビ1回、ラジオ3回、新聞2回、その他私的公的報告会は数知れずという超売れっ子ぶりである。意識変革はさておき、人のネットワークが急速に拡大しているのがうれしい。ボランティアの派遣については、発足後5年くらいはかかるとふんでいた。案外早く実現するかも知れない。

NVCは地球社会の成員である

最終的にひそかに目論んでいることがある。もはや国家からなる国際社会は終焉した、という認識を地で行くことだ。新潟からみると、東京は、意志を持たない単なる機能の集積にすぎない。国家など動きのとれない恐竜のようなものだ。せいぜい自分の糞に埋もれて窒息死だけはしないでくれといいたくなる。

そんなとき、互いに顔の見える集団として、一地方という意志的な主体がこの地球社会に乗り出していくことを、NVCは積極的に後押しする。だれかがだれかを踏み台にせずに生き生きとした地球を作り出すのは、顔の见えない機能や飛び道具を背負った恐竜にはできない。健全な地方主義に立脚しなければ。いずれ全地球の「良い地方」が手を結んでJVCを包囲しなければならない時もあるかもしれない。NVCはこの野望を実現するために、日夜おこたりに活動している。

しかし、現実には厳しい。NVCは未だに事務局すら持っていない。代表も規約上存在しているだけである。それでも動く。

地域で生きる — 遠野から

常民大学実践報告

小井口 ^{たもつ} 有

常民大学の開設

柳田国男の名著『遠野物語』と、『遠野物語』が観光資源になるのでは、と“民話のふるさと・遠野”として、行政が主体となったキャンペーンで売り出されたことにより、広く「遠野」の地名が全国に知られるようになった。

1984年春、それまで訪問者としてしか戻らなかったこのふるさと遠野に、家業の都合もあり、生活者として帰ったのである。

当時の遠野は、低迷する基幹産業といわれている農林・畜産業（現実には、就業者の数と面積が多いだけ）、さらには、数少ない雇用機会と若者の外部への流出等々、あらゆる面で厳しい環境にあった。そこで、様々な場面で聞かされる行政批判……随分大変な所に帰って来たものだったのだと思ったのである。

1年後の1985年春、青年会議所という組織に加入する機会を得、様々な人達の交流の中から多くの方々を知り、生活者として生きる事を学んだ。そして、その延長線上で、1987年の春に、明治大学の後藤総一郎教授の教えを得る機会に恵まれたのである。

その後藤教授の提唱によって、同じ年の夏、全国で十番目の「常民大学」が遠野に誕生することになった。

青年会議所の会員といった民間や、行政の若い人達を中心となって運営委員会を作り、約20人前後の受講生とともに今日まで、その活動は続けられている。

さて、この遠野常民大学の開講の主旨は、

- ① 柳田学を柱とした常民（そこに住んでいる人、生活者）の学びを目指し
- ② 異業種、異世代の集まる広い学びの場を持つことにより
- ③ この新たな歩みの中から明日の遠野の確かな生き方を考える力を醸成する。

つまり、柳田学といっても、様々な角度から理解されているが、私達は、自分についても、村や町についても、そこには必ず歴史があり過去があり、その歴史や、過去を知り、学ぶ力を持つことによ

て、現在、そして未来を見据え、予見する力が養われるという教えを理解する。そして様々な職種や、世代を越えた人達との交流を持ちながら学ぶことにより、遠野の常民としてこの遠野の今後の町づくりに責任を持った発言と行動をしていこうとするものである。

当初は、2カ月に一度、主宰講師として、常民大学の提唱者であり、かつ柳田研究の第一人者である後藤教授をお招きし、あるいは『遠野物語』にこだわりを持つ先生方をお招きし、会費制による身銭手弁当主義の学びの場で、柳田を、そして、ようやく、『遠野物語』を自ら、学び始めたところである。そこで、この常民大学は、10年間を一つの区切りとして、すなわち、10年間は続けようとの強い意志で運営されている。

その学びの過程の中で、去年は、全国にある常民大学から100人を超える人びとの参加を得、合同研究会を開催した。身銭手弁当に市からの若干の補助を戴きながらも主体的な企画と行動により、詩人の谷川雁先生をお迎えし『遠野物語』の世界を研究主題として学ぶことが出来た。

そして今年は、『遠野物語』が発刊されて八十周年ということで、記念事業として、やはり詩人の吉本隆明先生の他、民俗学の牧田茂先生、社会学の鶴見和子先生をお迎えし『遠野物語』の意味を主題とした講演とシンポジウムを開催した。今度は、県と市からも補助を戴きたいが、やはり主体的な企画と行動によって、全国から約150人とそして地元の人を含め約200人の参加者があり、大変好評を得たと自負している。また、私達の得たものも大きかったと思っている。すなわち、常民大学を10年間続けるその過程の一つの区切の中で、常民大学に学ぶ私達にも何かが出来るという自信を持つことが出来たと思っている。

単に机上での学びではなかなか得られない体験や、行動を通して得られるさらに広い人的交流、そしてそれによって教えられる様々な反省の材料など今後の私達が地域へのこだわりを持った行動には、どれ

もが必要な事であると考えてるのである。

『遠野物語』に先人の生き方を学ぶ

さらに、遠野常民大学では、この『遠野物語』発行八十周年記念の一つの事業として、『遠野物語』の理解と柳田学の精神を学んで行くための副読本的なものとして、柳田国男の『遠野物語』に対する論考をまとめ『遠野物語』論集、Ⅰとして発行した。この中には、考古学の柴田常恵が、小説家の島崎藤村や田山花袋、泉鏡花が、そして国語学者の金田一京助といった人びとが発表している『遠野物語』に対する論評をまとめてある。今後さらに自らで調査し、論集・Ⅱ、Ⅲを編集して行く予定である。

さて、今後の遠野常民大学は、ということになるが、後藤教授の指導のもと、遠野人による『遠野物語』の研究が今まさに始められようとしている。受講生からの意見として小学生向けの『遠野物語』に関する副読本的なものを作ろうとしている。これは、先の遠野の人による『遠野物語』の研究が、そのまま生かされると思われる。また、この遠野出身の人びとで様々な分野で活躍した先人達のやはり同じ様な小学生向けの小冊子を作っていきたいと思っている。そのことで、子供達が先人の生きざまと、祖父達、そして父達とつながる生きざまの中から、この地でも自信を持った生き方と、生の原点であるこの遠野の過去と歴史から、自らの正しい生き方を学んで欲しいのである。

そして、遠野常民大学は『遠野物語』からの学びを、より広範な人的交流の事業へと発展させつつ、地域・遠野に対して何が出来るかを示していかなければならないのであろう。

1993年(平成5年)、東北で初めて「国民文化祭」が岩手県で開催されることが決まっている。この時、遠野常民大学は7年目を迎えている。再び、10年の1つの区切として私達の学びの成果を、この機会に表現してみたいと思っている。

地域づくりの担い手をめざす

さて、私は地方にあっては、特に今の30代40代が、もっと地域づくりの中心にならなければならない、すなわち、これから20年後に責任を取れる世代でなければならないと考える。そして、私も含めたこの30代40代が、小学生、中学生の親として、自らの子供達に、きっちり自信と誇りを持った地域づくりを自らの背中に見せてあげることが出来れば、この地

域はすばらしい村となり、町になるのだと考える。その繰り返しが村や町の歴史となっていくのだと思うのである。逆に都会ではこの様な方法で自らの背中を見せてあげられる機会は少ないのではないだろうか。

かといって、地域づくり屋になる必要はないと思う。私達にはそれぞれ生活者としての自ら継続していかなければならない生活・仕事があるはずである。

お祭り騒ぎの一過性の地域づくりでは長続きするはずがない。やはり、その地域に根ざした地道な活動の積み重ねこそが長続きする本当の地域づくりになると考える。

その地域に根ざした活動の場が遠野常民大学となってくれば、という期待が私にはある。常民大学の出発点である「歴史を学んで現在を知り、そして未来への予見力をつける」ことで、地域づくりの正しい方向性を知ることが出来ることを確信している。

いずれにしても、地域は地域の主体で地域へのこだわりを持ちながら、地域の生活者にとって快適な村や、町にしていかなければならない。でなければ地方の過疎はさらに進み中央一極集中ばかりでなく、広い意味での地方においても、地方都市への一極化も避けられなくなってしまうのである。

今こそ私達がしっかりしなければ、次の地域づくりの責任世代すらこの地には居なくなるのである。

遠野常民大学のメンバーは、実に多彩である。馬喰、歯科医師、農業者、畜産家、商店主、教師、校長、行政マン、会社員、主婦等々、20代~60代のまさしく異業種、異世代の集まりであるメンバーの情熱をまとめながら継続しなければならない責任は重い。が、先日、JVC谷山ラオス代表と初めてお会いする機会に恵まれた。実に素直にラオスの農村の話やを伺うことと、若干の意見を述べる事が出来た。常民大学という学びの場を通じてのことだと思う。

さらに多くの方々に、この常民大学を通じてお会いする機会があると思うが、すべて大切な出会いとし、そして地域づくりに生かしていかなければならない。

先人達が、祖父達が、父達が汗を流し血を流し作り上げたこのすばらしい遠野を、さらに私達の情熱をプラスして子供達に渡してあげなくてはならない。



遠野との出会い

岩間 邦夫

遠野へ

7月13日から15日にかけて岩手県遠野市で、「ラオス幻の布展」「ラオス舞踊と民族音楽の夕べ」が、JVCとギャラリーイカットの協力により、遠野ユネスコ協会の主催で行われた。今回私は、この催しに出演するラオス人一行及び谷山さんに同行させてもらい、遠野見物をしてることが出来た。しかし谷山さんとしてはこの出張で、今後のラオスプロジェクトの新しい展開（具体的にはラオスでの織物保存館の建設）のためにユネスコとのつながりをつけるということと、同じ問題意識を共有出来る人を地方において探し出し、ネットワークを広げるという目的を持っていたようである。

1泊2日の遠野滞在中、見て来た事をざっくばらんに書いてみたい。

谷山さんは、仙台で市民活動を行っている人たちと話したり講演会等を行うため、先に東京を出たので、私がラオス人一行6名を引率する形になった。舞踊を披露するラオス人女性3人が当日の朝、待ち合わせ時間に遅れて来たが、これは予想していた事なので余り気にならなかった。しかしせっかく舞踊を披露するにふさわしい、かっこいいスタイルをしていながらそれを保つ事など気にもかけず、新幹線の車中終始ポテトチップスを食べ続けていたのはちょっと気になった。

催しは「遠野ユネスコ協会創立20周年記念」ということで盛大に行われた。JVCとしてはラオスの文化だけでなく、ラオス社会が直面する現状にも目を向けてもらいたいと、谷山さんの話す時間を設けてもらった。その後ラオス人による舞踊と民族楽器の演奏が行われたが、ラオスの文化に直接触れる機会は日本の中でもまだ珍しいこともあって、相当関心を引いたようだ。特にラオス舞踊の優雅さは印象に残ったようで、会場を出て行くお客さんのもらす言葉からそれがよく感じられた。織物展の方は時間がなくてゆっくり見られなかったのが残念だった。

夕方からは遠野ユネスコ協会主催のレセプションに出席した。谷山さんも含め様々な関係者のお話があった。



ラオス人たちと遠野を訪問（右側が筆者）

小井口さんのお話

夜は2次会へとくり出した。そこで、遠野で常民大学を主宰している小井口有さんの話を聞く機会を得た。東京を発つ前、地方で何らかの問題意識を持って活動している人とつながるため、谷山さんが適当な人を探していた時見つけたのが、朝日新聞の「ひと」欄に紹介されていた小井口さんの記事であった。そこから遠野ユネスコ協会を通じて小井口さんを紹介してもらったわけだが、初めて会ったにもかかわらず、ざっくばらんにいろいろな話をしていた。以下、小井口さんとの話を通して感じた事を思い出すにまかせて書いてみたい。

何らかの活動を、仲間を増やしながら起こしていく際の有効な手段として、小井口さんは「事業」という言葉を使った。それはまた、自分達の考えや活動を広く伝えるための手段でもあると思うのだが、具体的には常民大学や、それを続ける過程の節目で行われる発表会やシンポジウム等の企画がその「事業」にあたるのだろう。JVCの活動にあてはめていえば「イベント」ということになる。私自身、JVCのラオスプロジェクトを国内で支援するボランティアグループで活動しているが、一時期メンバーが事情で次々と抜けて活動が消え入りそうになった時、残りのメンバーの中からイベントの企画が出て来た事で活動の柱が出来、新しく来る人もスムーズに受け入れられて何とか活動がもち直した事があった。それだけに事業を通じて活動を盛り上げていった小井口さんの話を聞き、あらためてJVCとしてイベントを行う目的、その意義を再確認出来たような気がした。

また、どういう話の流れからその言葉が出て来たかは忘れたが、

「やってみて、言って聞かせ、やらせてみる」

という小井口さんの言葉も印象に残っている。JVC

の活動を通して自分が学んだのは、やってみて始めてわかる事、気づく事が如何に多いか、という事である。自分が考えている事の実現に向けてとにかく行動を起こしていく事で、具体的な問題点や自分に足りない部分等がはっきりと見えてくる。例えば、自分の頭の中ではいい企画だと思っていても、他人がどう感じるかというのは、人それぞれ感じ方・考え方は様々だから、実際に話してみないとわからない。また、何かをやるようとする時には様々な作業が付随してくる。人に説明したり、文章を書いたり、チラシやポスターの内容を企画したり、印刷機等の機械を使ったり、準備の段取りを考えたり…。それらを通して自分にとって何が苦手かを知ると共に、自分の果たせる役割を発見したりすることもある。そうして様々な問題点や自分自身の課題を克服していった、自分が考えている事の実現が近づいてくる。頭の中で考えたり議論するだけでは進まない。とにかく行動してみる事で可能性を探っていく、試行錯誤しながらより良い方法を見つけていく、そしてその経験を通して自分自身が成長していく。そうすればまた新しい展開や可能性も見えてくる。そうした積み重ねの上に今のJVCがあると思う。JVCを知るには、一緒に行動すること、JVCの試行錯誤に参加することが一番だと思う。言葉だけでは実感出来ないものがある。だから「やってみて、言ってみせ、やらせてみる」という言葉は、仲間と共に活動の質を深め盛り上げていく上で、大事な事をよく言い表していると思った。

この他にも、含蓄があってしかも覚えやすい標語のような言葉をたくさん聞かせてもらった。

「俺がやらなくて誰がやる」

「今やらなくていつやる」

「現状維持か現状打破か」

「ほめてやらなければ人は動かない」など…。

最後の「ほめて…」に関連した事で、自分のやっている事を見守ってくれる人がいるのはすごく心強いし大事な事だ、という話になった。私の場合は、谷山さんに対していろいろ疑問や文句やぐちを言ってきたが、それでも自分の考え等、いろんな事を知ってくれてる人がそばで見えてくれたのはすごく大きな励みになった。

「小井口さんの場合はどういう人が見てくれてますか」

と問うと、

「朝日新聞」

との答えだった。思わず笑ってしまったが、「大新聞が自分の活動に注目してくれたのは励みになった」ということで、考えてみれば自然である。では

「新聞の記事になる前は何か支えでしたか」

と問うと、

「妻」

という答えが返ってきた。この時は本当にうらやましかった。自分のやる事を理解し、見守ってくれる人が一番身近な所にいるというのは、この人にとって本当に大きな強みではないだろうかと思った。

第三世界と地方をつなぐ

翌日は遠野ユネスコ協会の人達に案内されて半日市内観光を行った。その中で、昔の遠野の民家を再現した場所があった。L字型の建物で、馬と人間と一緒に住んでいたという「曲り家」、水車を動力源とする脱穀小屋、機織り機のある小屋、風呂小屋や便所小屋。それら自体それなりに面白かったが、より以上に面白かったのは、それらを熱心に食い入るように見つめる2人のラオス人の様子であった。小屋の中の様々な仕組みや道具をあらゆる角度から見ながら、これは何の目的で使うものか、ラオスにあるものとはどう違うのか、といった事を夢中になって論じ合っていた。その熱心さにつられて思わずずっとついてまわり、昼飯を食べる時間がなくなってしまった。

日本にも昔はラオスのような暮らしがあったのだろう。今ラオスにある、そして日本にはもうないその暮らしがいったいどんなものなのか、無性に見たくなった。

最初遠野に着いた時は、何て刺激の無さそうな町だろうと思った。しかしそこにどんな人が住んでいて、どんな事をしているのかを具体的に知って、今後も互いの活動から学び合えるものを多く得られそうな気がした。

最後にもう1つ印象に残ったこと。私を含めたラオス人一行を、車で送迎等いろいろ世話をしてくれた青年が、初めは珍しい外国人に対してひどくごちなく、明らかに別世界の人を見ているような感じだった。しかし半日もたたないうちにすっかりうちとけて、まるで旧知の間柄のように接するまでになった。その変化が、第三世界と地方をつなぐ事の意義、そしてその中から新しいものが生まれて来る可能性を感じさせてくれた。

日本の森、アジアの森

- 14 -

む人のトイレの場所でもある。池のまわりは野菜園になっていて、トウモロコシ、トウガラシ、サツマイモなどの野菜が植えられている。また付近にはヤギ小屋があり、ニワトリも放し飼いされている。

この野菜園の周囲に林がある。林には用材や燃料になる生長の早い木と、さまざまな実をつける果樹が植えてある。この林はいわゆる我々北の人間が想像しがちな、一種類の樹木が整然と並んでいる林ではない。背の高い木（ココヤシ、ジャックフルーツなど）の下に、中ぐらいの木（チョウジ、バナナなど）があり、その下にはさらに背の低い木（パイナップルなど）がある。そして、地表にはウコンやタロイモなどの植物が植えてある。一見雑然と見える林だが、見事に計算されたものである。プカランガンに生育する植物の種類は多く、一軒に約50種、一村に約250種もあったという報告がある。

しかも、多くの木は多目的樹（マルチパーパス・ツリー）である。たとえばジャックフルーツやマンゴーは果樹であると同時に、家の修理などに使う用材でもある。ギンネムは枝を落として薪として使うが、若い葉やさは野菜として食べられるし、家畜の餌としても有用である。

このように、プカランガンは主食以外のすべての食料の供給源であると同時に保存庫でもある。熱帯の気候のなかでは一年中常に食べものがあり、食事の前に取りに行きさえすれば、新鮮な食料を手に入れることができる。さらに、家畜の飼料源であり、燃料、用材の供給源でもある。このプカランガンと主食源のいくばくかの水田さえあれば、自給自足できるといわれている。

このように書いていくと、このホームガーデンはいかにも広そうな印象を与えるが、実際はそう広いものではない。大きなもので0.3ha、たいていは0.1～0.2haということである。つまり、かなり集約的な農業であり、土地の広さの割に大きな人口を支えるのである。

自然にやさしい農業に地球を救うヒントがある？

このように見てくると、アグロフォレストリーは3つの特長を持っていることがわかる。そのひとつは生態的に非常に安定した、今流行の言葉でいえば地球にやさしい農業形態である。そこでは化学肥料や化石燃料を最小限にしか使用しない農業が可能であり、農業を使うことも少なく、生産物も安全である。また、生産物の味覚の面でも現在の大量生産方

式よりも期待できそうだ。

もうひとつの特長は、きわめて自給自足的だということである。いったん、生産方式が確立すれば、比較的狭い面積で、外部からの資源をほとんど必要とせずに半永久的に生産、生活を続けることができる。自然が豊かな東南アジアでは労働力すらそれほど必要としないであろう。

最後の特長は第二の特長の背面にあることだが、現在の状態では、大量生産には向かず、現金収入には結びつきがたいという欠点がある。年金生活に入った老人や、世捨て人的な人たち以外の北の人々にとっては、実生活としては魅力のないのも事実であろう。

日本にあった熱帯林再生のヒント

最後に、これまでの例より林業によった例を紹介しよう（村尾行一著『人間・森林系の経済学』都市文化社刊による）。千葉県山武地方には雨量も少なく、冬期には乾燥するため、一般には杉、桧などの林業に適した土地とはいえない。そこに、林業を成立させるために、工夫がある。

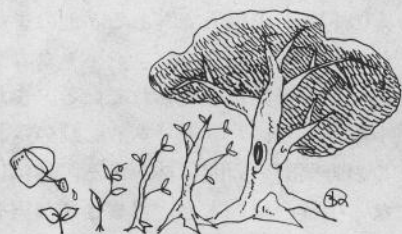
まず、いままったくの荒地があるとして模式的に述べていこう。荒地には、養分が乏しく乾燥した土地で成長できる松を植える。その一方、松の間に、麦、落花生などを植える。松がある程度大きくなると、部分的に伐採しながら、麦などの間に杉の苗を植えていく。杉の苗のごく初期には日光が禁物だが、麦、松などが陽射しをさえぎってくれる。杉が部分的に伐採できる大きさになったころ桧を植え、松、杉を切りながら桧を育てていく……。

この林業の特長は次のようにまとめられる。

「乾燥・悪地でも生育する松の前植である。すなわち、松が風衝を防ぎ、林地への日射を遮り、林内湿度を高め、そして落枝落葉および根系の作用によって土壌を造成し、さらに肥沃化することによって杉が生え育つに適した環境が造成される。さらに桧の後植も、桧が陰性の樹種であることによって林内の暗い下層空間の活用であると同時に、林地の乾燥を防いで杉の生長を助長する」（同書）

貧しい土地をそこから収益を挙げながら、豊かな林にするすぐれた方法がここにある。松をイビルイビルなどの生長の早い木に、杉や桧をラワンやチークに見立て、熱帯林の再生のヒントにするというのは素人考えであろうか？（A.G）

私がJVCでみつけたもの



13人目の子供を出産した47歳のお母さん。すべて自宅分娩。3人は幼い時熱病で死んだと、たんたんと話す。結婚、妊娠、そして自宅での出産。とっても自然なんです。

核家族化の進む日本の（若い）お母さん方は、

子供の夜泣き、
発熱と、とにかく不安でいっぱいのため、
夜間医療テレ

フォンサービスの病院に相談したり、駆け込んだります。

ここラオスにいれば、私も自然なお産ができるのでは——そんな安心感さえ与えてくれる国ラオス。だから開発だ援助だと言わずに、ラオスはそのままずっとこのままでいてもいいんじゃないか、とさえ思うのです。

ところが、そんな素朴な純粋なラオスには、良かれ悪しかれ、文明が土足のまま踏み込んでくる

のです。今、先進国に住む人々は、先進がゆえに後から気づいた悪しきこと、失敗、そして自然破壊。だからまだ防げるラオスに同じ後悔をさせぬために、私たちががんばっているのです。豊かな物質にあこがれ、入ってくる新しい物を拒むこと

を知らない人々を利用してはいけなと思うのです。

どんなにい

ろんなことを思いあぐねてみても、外国人はいつかはこの地を去るのだし、だから、ラオス人の力でこの国のすばらしさを守っていけるように考えていきたいと思うのです。

難しい言葉はよくわからないのですが、一生懸命に講義を聴く受講生たちの若い熱い視線を見つけると、私も力が湧いてきます。トレーニングが終了したあと、彼女たちを支えていける力になれば、と毎日願っています。

いつまでも ラオスの良さを失わないで

ラオス 原田恵美子

今まで主に“インドシナ難民”と言われている人々と接して来たが、しばしば思うのは彼らが政治的社会的理由で国を出て来たにもかかわらず、しっかりと自分たちの文化の上に生きていることである。JVC日本語学校の月一回の文化オリエン

テーションでは、時々日本と生徒の国の文化を紹介しあうプログラム

を行っている。互いの習慣や伝統行事を実演したり、料理を作ったりするのである。こんな時彼らに歌や踊りをリクエストする。すると次々に彼らのレパートリーを披露してくれる。

しかし彼らから「日本の歌・踊り」をリクエストされた時が困るのだ。私はいつも「さて何を歌ったらいいのか？」と迷い、踊りにいたっては完全にお手上げである。ある時は「日本の衣装を着てもらおう」ということになり、友人たちからゆ

かたを借りた。すると何と本式の帯を使うものがあったのだ。誰も結

自分の国の文化を大切にしたい

タイ 熊沢ゆり

び方を知らない。仕方なく適当に帯を巻きつけ端を中に入れてごまかしたが、自国の衣装の着つけすら出来ない自分が情けなかった。

着物と言えば、成人式の頃「商業主義になんか

乗せられないぞ」と思っていた。今もこの意見は変わっていない。これは私たちの日常から伝統文化が離れてしまったことが問題なのではないか…。

自分の土台となる文化は自然に日々の生活の中で身についていくものではないだろうか。20何年も日本で普通にくらしてきてそれが無い自分が“根なし草”のように思えてくる。

生徒たちはタイ国内の“難民キャンプ”という極めて不自然な環境の中で生活して来た人々であ

る。長い人は10年以上も滞在している。しかし当たり前に自分の根となる文化を受けついで来ている。その自然な生き方が私には新鮮だ。

彼らのそんな生き方を見て以来、私はこれからどこに住もうと、他の文化を尊重し、その良さを学びつつも自分の“根”となるものを持って行きたいと思っている。肩ひじはらず“自分にとっての自然な生き方”への私の模索は、始まったばかりである。

「カンボジアで仕事をしてみませんか」と言われ、考える間もなく、外国の経験がなくても英語ができなくても大丈夫と言われ、1年間ぐらいならと思いながらもう3年が過ぎてしまった。

はじめてのこととてまどうこともあったが、今はのんびりと
生きている。
私もアジア人
だったと思
いをしている。

お互いの違いを認め 同じ人間であることを知る

カンボジア 馬 清

カンボジアでよかったのかもしれない。ボランティアや援助のことは、日本で生活している時は考えることもなく過ごしてきたが、今は少しずつ考えている。考え方もだんだん変化しており、今後とも変化していくと思うが、今は基本的には緊急援助や生活環境の整備以外の援助はあまり必要がないのではないかと思っている。

やはり自分の国のことは自分たちで考え、自分たちで作り出すものではないか。それは過去において今の工業国がこの国の富を搾取し、生活基盤も壊されているかもしれないし、今も搾取されているのかもしれないが、それを自分たちで変えようとしなくて援助だけに頼るのはおかしいと思う。我々は彼らが自分たちで考えようとする、自分たちで作りだそうすることを助け、アドバイスすることが、特にNGOの援助になっていくべきだと思う。彼らの意識を変化させるような手伝い、教育等の援助がこれから大事になってくると考えている。意識を変えるとんでも、彼らの考えを我々の方に持ってくるのではなく、自分たちで考える、自分たちが良いと思う方法、方向を作り出すような援助だと思う。

はじめは彼らの内に入り、“共に”と思った時

もあったが、今は無理だと思っている。国土も違えば環境、教育も違う。生活をする上での価値観が違う。しかし、違っても生活はできるし、仕事も出来る。たがいに良い所、悪い所を認めあえばよいのだと思う。修理技術のような場合は、より良

く直せる方法、
より安全に直
せる方法を納
得させれば彼
らも変わって

くる。ただより早く、より簡単に、その物の構造を知り、本来どんな働きをしているのか、それが本来の働きをしないとどれだけ危険かということを知れば、より納得も出来るし、安易な考え方でよしとしなくなっていくだろう。第三世界という言葉があるが、3番目の世界なのか、今までになかった新しい世界のことなのかと疑問に思っていたが、カンボジアに来て、私にとっては新しい世界であると思うようになった。

長い歴史の中で文化も環境も違う生き方をしてきた以上、考え方、価値観が違うのがあたり前で、これを認めあうことから始めなくては、共に同じ人間として生きていけないのではないか。私は外の国で生活したことにより、人間が等しく思えるようになってきたし、また、カンボジアの長所、短所も見えるようになってきたと思う。長所、短所を認めあい、より良く生きていこうと変わっていくことができれば、援助をする側も受ける側もより有効に生きることが出来るし、そうなってほしいと願っている。

最後にひとこと言えば、大国にふりまわされている小国は悲しいものだとついつい思ってしまう。

内戦の拡大とプロジェクトの中断

エチオピア代表 山田 盛



エチオピアは去年から今年にかけて、1974年の革命以後、最も大きな変化の渦中にある。個々の状況をそれぞれ独立したものとして捉えれば、繰り返しこの国が直面し、しかし何等根本的な解決を得ることなく、うやむやな形で放置されてきたことが多いのだが、それらがほぼ時を同じくして、しかも、かつてない震度で全土を揺さぶり続け、徹底的な変革なくしては、決して収まることはないように思える。1984年以来活動を続けてきたJVCも、この大きなうねりの中で、直接、間接に制約を受け、改めて、その活動の意味と展望を問い直されている。ここでこの1年間の状況とJVCエチオピアがたどってきた道を振り返ってみたいと思う。

内戦、干ばつ、そして自由化政策

30年近く、独立あるいは民主政体を求めて戦い続けてきた、エリトリア、チグレの（人民）解放戦線（ELF, EPLF, TPLF）は、北部4州（エリトリア、チグレ、ゴンダール、ウォロ）のほとんどの地域から政府軍を一掃し、その勢力は衰えを見せることなくアディス・アベバを目指して南進を続けている。ソ連、東ドイツ、キューバのエチオピア離れとそれに続くイスラエルの介入により、（人民）解放戦線を支援するアラブ諸国と政府側を援助するイスラエルの、紅海の利権をめぐる対決という様相を呈し、戦線の拡大とは裏腹に、本来の意味はぼやけ、平和的解決への道は、まだ遠く、険しい。ゴンダール、ウォロ両州で反政府運動を展開してきたEPDMはTPLFと共闘し、OLFもエチオピアの西部、南部で激しい武力闘争を再開している。それぞれの勢力の主義、主張には違いがあり、また主体となっている部族も異なるが、メンギスツ現政権打倒を当面の目

標に、直接、間接の協力体制ができている。

10～15年周期で、繰り返しエチオピアの農民を苦しめてきた、雨不足による凶作とそれに続く飢餓は、ここ数年、北部地方を中心に、ほとんど常態となり、世界的な関心を集めることもなくなっている。昨年から今年前半にかけての干ばつは、その規模において、100万人を越す犠牲者を出した1984、85年のそれを上回ると言われながらも、激化する内戦の中であって、対応が遅れただけでなく、今なお救援活動そのものが十分に行われていない。

15年間、教条的に固守し続けてきた社会主義路線との決別を思わせる自由化政策の発表は、国民の支持を完全に失ったメンギスツ大統領の、単なる保身と西側諸国からの武器援助を目的とするものとして、冷やかに受け止められている。政策は、農村部を中心に、既存の組合組織の解体をもたらした程度で、まだ具体的なものになっていない。住民は不信感と戸惑いの間を揺れ動いている。

JVCエチオピアの選択

TPLFの南進と解放地域の拡大、それに対する政府軍の激しい空爆を伴う応戦という状況の中で、昨年10月、JVCはプロジェクト地マーシャ村からの一時的撤退を余儀なくされた。飢餓が着実にその歩みを速めつつある一方、プロジェクトの早期再開がほとんど絶望的となった今年2月、東京より林事務局長を迎えて、数度にわたる調査を行い、その結果を踏まえて、東ゴジャム州での緊急救援活動の開始を決定した。

ゴジャム州は、穀倉地帯として知られているが、青ナイル沿いに慢性的な凶作にあえぎ、また今年の干ばつによる深刻な被害に苦しんでいる低地が存在することは余り知られず、これまで外部から救援の手が差し伸べられることもなかった。JVCは他団体に先駆けて救援活動を開始し、FHI, CPAR, EOCがそれに続いている。食糧配給は栄養失調児のケアと保健衛生教育の実施、そしてフード・フォー・ワークの原則を遵守しつつ行われている。これまでに2回の配給を終え、現在、3回目の配給を10月中に実施すべく準備を進めている。



大盛況！ エチオピア支援バザー

8月26日、残暑の続く厳しい日差しの中、第2回エチオピア支援バザーを開催した。この日に向けて全国から集まった品々は2,000点を越え、中には、激励の手紙を添えてくれる人もいた。当日、会場の横浜市民防災センターでは、物品販売の他、横浜中華街では知る人ぞ知る永楽製麺所が自慢のキッチンカーを出動させ、やさそばの販売に協力してくれた。また、今回は日本通運株式会社の協力で宅配便（ペリカン便）のカウンターを会場に設置し、大きな物でも迷わず買えるよう工夫した。果たして会場には800人を越える人々が集まり、前回を上回る1,443,589円の純益をあげることができた。

このお金は、現在一時帰国中のJVCエチオピア駐在代表



の山田に託し、現地での緊急食糧配給に役立てます。物品を提供してくれた人はもちろん、何カ月も前からバザーの準備に助力してくれた主婦や学生の皆さん、当日うだるような暑さの中、ぬいぐるみをかぶって宣伝をしてくれた横浜ボランティア協会の方々、そして我々の活動に賛同し快く場所を提供してくれた横浜市民防災センターの方々に深く感謝し、報告とさせていただきます。（清水俊弘）

ベトナムでやるぞお〜！

●稲見 圭さん（写真左）

大学3年の時、ユーラシア大陸を1年間旅した稲見さん。ボランティア団体ってヒマな人がやる慈善事業ぐらいに思っていたのが、林さんらに引きずりこまれるようにエチオピアの後方支援活動をして1年。今回、意気込みがかわれてベトナムへ。まだ学生で「卒業試験はぜったいパスします」「食べていくためだけでなく、自発的になにか社会に働きかけたくて」「とにかく必死にやるしかないですね。余裕がでてきたら農村地域でのプログラムの可能性も徐々に考えていきたいです」

失いたくないもの＝おいしい食べ物、失いたくないもの＝体重（このムジュン!）、一日20回くらいオナ

ラが出るという、22歳。全身に若い力がみなぎっている稲見さんです。がんばってください!!

●中野 周二さん（写真右）

気はやさしくて、力持ち。ドカベン太郎といった感じの中野さんは、自動車整備技師。

「ただ教えるというんじゃなくて、訓練・需要・収入、それが現状で可能か全体を見ながら訓練していかないと」という。「ものを押しつけてもダメ。形は悪くても、現場

から現場にあった必要な技術が生まれてくるようしむけることが」青年協力隊員としてマラウイに3年強、民間でフィジーに1年、指導してきた経験からだ。

「自分のヤル気しだいでいくらでも広げられる。それがおもしろさじゃないですか」

目に見えないもの・機械の電気と女の人の気持ちが一番こわい。特技は「雨もりの修理!」176cm, 75kg, たわしのようなヒゲの顔がガキのように笑っていました。

（荻野洋子）





人の営みが森林を破壊する

およそ1万年前、農業が始まってからの人間の歴史は森林破壊の歴史と同義語のようだ。森林を切り開いて耕作地をつくり、村や町をつくり、木材で家をつくり、薪として燃やして料理をし、暖をとってきた。都市が大きくなればなるほど、その周辺の森林の消失度が高く、森林の破壊が環境の荒廃を招き、続いて都市の破綻を招いた例は、チグリス・ユーフラテス河流域に栄えたメソポタミアをはじめとして、枚挙にいとまがない。エチオピアでは都市周辺の森林が消滅するたびに遷都し、現在の首都アディスアベバという地名も「新しい森」を意味している。

これに比べると、植林の歴史はないに等しい。ヨーロッパでは、13世紀から18世紀にかけて森林が破壊し尽くされ、今日見られる森林は19世紀後半からようやく形成された。しかも、その植林は、航海用の船建造をはじめとして、第三世界の森林を伐採する植民地経営の経済基盤があってはじめて可能となったものであった。

植林の功罪

第二次世界大戦以後の第三世界の森林破壊の激増は、北側諸国の経済体系に、より組み込まれることで生じてきた。森林伐採、鉱石採掘、商品作物栽培など、森林破壊の代償として得られた「資源」はことごとく北側諸国に運ばれる。経済効率のみを優先しているため、森林の保全はまったくなされておらず、その地域に住む人たちは生存の危機にさらされるまでになった。北側諸国の犯罪的な略奪行為の責任追求はひとまず置くとして、その地域に住む人たちは自身は森林保全をどう考えているのだろうか。

屋敷地を中心とした、果樹、薬樹などの有用木の植林が見られる社会は多い。これらの樹木は日除けなども兼ね、豊かな空間を作りだしている。では広域植林はどうか。日本の植林も含めて、広域植林の

ほとんどは、森林を木材資源とみなす商業植林である。木材生産のための森林経営は収穫サイクルが長いから、個人で行うことの動機づけは難しい。農業経営など、他の営みと並行して行うか、あるいは広大な土地を占有することによってはじめて可能となる。そのため、多くの国で、広域植林は国家単位で行われる。そして、木材利益は、国家、あるいは国家から委託された一部業者の手に入る。

森林は、植林とともに、どう管理するかということがもっとも問題となる。利用できない森、入ってはいけない森は、その周辺に住む人々の暮らしに意味を持たない。意味がなければ、管理・保全する心も生まれない。こうして植林はしたもの、豊かな森林が形成されないことも多い。

植林には、商品価値の高い木、早く生長する木など、経済効率が第一義的に考えられる。したがって、広域が単一樹種で占められることがほとんどで、虫害などが発生すれば無惨に全滅することになる。全滅しないとしても、地上・地下ともに生物の分布が単純になり、生態系は著しく破壊される。

その土地で暮らす人のための植林

これまでみたように、森林はその土地に住む人たちの暮らしと密接に結びつくことによってのみ保全される。したがって、安易に植林技術のみを伝えれば定着するものではなく、ましてや外部の人が出かけて植林してきても、そこに住む人たちにとって生きた森林を形成することは難しい。

いまでも森林の豊かな地域においては、森林は地域の人たちの生活を支え、人々は森林を支えている。しかし、森林が失われてしまった地域では、人々は森林を支える知恵を失ってしまった。植林の成功か否かは、その地に住む人々にどう森林を意味づけるかにかかっている。

(岩崎美佐子)

JVCプロジェクト

1990年8月25日現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2、4土曜日 午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 林 達雄(事務局長) 熊岡路矢、星野昌子、 前川昌代、山口誠史、 岩崎美佐子、富安光子、 今泉 恵、鈴木由子、 富安庸太郎、柴田久寿子、 高梨直樹
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内での渉外、事業計画、資金調達等を行う。 7月26日、エチオピア支援バザーを開催した。全国から集まった約2000点の物品を売り、約150万円の収益を上げた。9月のエチオピアスタッフの報告会、10月の管洋志写真展、11月のポートウォークよこはまの準備をしている。		清水俊弘
日本国内	●定住難民プロジェクト 8月12日、神奈川県の海の祭典「サーフ'90」の平塚会場において「ビーチ、タクロー(カトー)、フェスティバルin湘南」を開催した。参加者は約80人で、ラオス人が見せる技の数々に歓声上がり、スポーツを通じた一大交流イベントとなった。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金、 ケアハウス さくら苑	小野豪大、他約60人
エチオピア (東ゴジャム州) ビチェナ	●ビチェナ緊急救援活動 東ゴジャム州、青ナイル峡谷沿いの低地斜面に住む7万人の干ばつ被災者に対して①フード・フォー・ワークによる食糧配給、泉の保護、環境保全、支道建設、②保健衛生教育と診療所への支援を行いつつある。 —配給に必要な食糧3,000トンのうち、957トンカナダ政府から調達し、第1回目の配給を終えた。 —同時に、テーブル台地の縁から低地までの道作り(歩くための道)を、現在行っている。 —再三にわたる調査の結果、8月15日より近接地域21カ村を含め、7万2000人の被災者へ食糧配給を開始。同時に栄養失調児に対するプログラムも始まった。 ●総合的復興促進(マーシャ村) 内戦のため昨年11月より中断している。 再開が待たれる。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動、 モラロジーMIRC、 東京グリーン・ ウォーク、西本願寺、 Tree for lifeの会、 中部善意銀行、 毎日新聞社会文化事業団、 JVCカレンダー、 メサイアコンサート エチオピア救援バザー	山田 盛、江原浩昭、 江原広美、田尻真由美、 寿賀一仁、Solomon, Shikur, Ali, Tekleyohannes, Yodit

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲトー郡) ハルバ・キャンプ (ゲトー部)	●農業による自立促進 強い風の季節である。雨期も終了し治安もやや安定してきたため、新農場の建設を再開した。すでにバナナ、レモン、グアバ、パパイヤなどの果樹とネームツリーなどを各農場に配布した。新農場の支援にともない、再びポンプオペレーターのトレーニングを実施する。 昨年以降開設の農場は、苗木の定着も大変良好で、複数の作物を栽培し、好ましい農場の運営をしている。モデルファームは以前からの計画通り、7月末をもって地元農民へ変換した。	UNHCR, 仏国土をつくろう会 メサイアコンサート	磯田厚子, Siyad, Muhubo, Aoki, Hire, Rashid
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 新規の支援依頼者が押し寄せ、今月はその人々へのインタビューや状況把握に追われた。UNHCRの撤退がいよいよ本格化してきたため、難民も本気になってきたようだ。 今年計画した家畜繁殖プロジェクトは、対象の候補者を選考しつつある。対象は食糧配給カードのない遊牧民だった難民である。候補者との合意ができればいよいよプロジェクトを開始する予定。	UNHCR, R.I. Japan	船川秀夫, 船川三貴子 Shuqri, Mohamed
カンボジア カンボット県 プノンペン市 カンダール県	●サンタビエップ技術学校 / ワークショップ 車両による国内輸送が復興のために果たす役割を重視し、①ワークショップ(修理工場)の設立 ②自動車の部品等の供給 ③自動車整備士の養成を初期の目標として、1986年にこの事業を開始した。JVCは現地実施機関の運輸省自動車輸送公社と人材面、技術・理論面で協力し、第一期、第二期と訓練を行ってきた。 輸送公社には現在 100 台余りの日本製トラックがあり、JVCが部品等を供給し、現地の自動車整備士が修理、メンテナンスに当たっている。 かつて日本に留学したノップ・ティムが加わり、第三期に向けて新しいカリキュラムやカンボジア語の教科書の作成にあたっている。授業は9月7日に開始予定。生徒の定員は25人で、輸送公社から10人、運輸省の他の部局から10人、研修生として孤児5人を受け入れる。理論の授業は開校当時から教べんをとっているタック・カンと日本人スタッフ、及びノップ・ティムが担当する。 ●RINE(ライン)プログラム【母子保健活動】 母親教育、危険な妊娠の発見と早期移送、分娩等に携わる助産婦の訓練や医療器具・医薬品の供給などを行う「母性保健」と、小児発育検診や検診で表出された栄養失調児のケアを行う「小児保健」活動を行っている。 ●井戸掘り・給水 バットンバン、バンティエンチェイの両県で、内戦により国内避難民となった人々のために20本の井戸を掘る。この緊急援助活動は7月から始められ、現在までにバットンで5本の井戸が完成した。 一方、通常の計画に沿ってコンボンチュナンで5本、カンダール県で5本、プノンペンで3本の合計13本が今年に入ってから掘られた。 ●内戦による国内避難民への緊急援助 戦闘の激化によって、バットンバン県、バンティエンチェイ県に10万人以上の避難民が流出し、政府、カンボジア赤十字とNGOが協力して救援活動を進めている。	創価学会青年平和会議、モラロジ-MIRC、立正佼成会、日産労連、西本願寺、善興寺ダーナ基金、高岡寺族青年会、毎日新聞大阪社会事業団、明るい社会づくり運動神奈川県協議会、浄土宗東京教区青年会、国際保健協力市民の会(SHARE)、四日市商業高校、JVCカレンダー、全日本仏教青年会、カリタス・ジャパン、「第1回カンボジア・クラシックコンサート」、真如苑、「武蔵野市100周年キャンペーン募金」、生協ひろしま、銀座ライオンズクラブ、メサイアコンサート 笹川平和財団「国際平和輸送サービス」	古西 勇, 馬 清, 杉江美子, 本橋 栄 「現地の実施・調整機関と主な担当者」 (運輸省) 国際局 Meas Sameth 自動車輸送公社 Thach Cang ワークショップ Am Deang Nop Thim Hget Sorn Kham Bora (保健省 母子保健局) Ann Sarun 医師 カンダール県 保健委員会 Nhim Nhem 医師 プノンペン郡 保健事務所 Sam Sarung 医師 母子保健活動 Tui Kath Mat Samon (農業省 水利局) The Iv Khim 井戸掘り活動 Hok Setha So Sarin

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 ・8月11日、12日、サタピップにおいて、スタッフが全員参加しミーティングをもった。今年の各プロジェクト評価に関して、この半年の報告があった。 ・モラロジーよりワゴン車が寄贈された。 ・スタディーツアーなど、以下の訪問者があった。 NVC-27名、IAJH-21名、くわの実会-7名、JVC-11名、個人-3名、計69名。 ●奨学金プロジェクト 新しいプロジェクト地の可能性を探っている。 ●図書館 大人を対象に、タイ語の読み書きクラスを始めた。	全国社会福祉協議会 電力総連 メサイアコンサート Tree for lifeの会、雄勝町町内寺院会、国際ソロプチミスト駿河、からし種モラロジーMIRC	Pornpimol Chaiboon, Kamol Mingmuang, 大石道子, Manas Torkan, Samruay Jongyorklang, Suntaree Lawsuan, 池島千津子、主婦ボランティア15名
カオイダン (カンボジア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 8月25日をもって2学期の全課程が終了。パンタットキャンプは8月いっぱいまで全面閉鎖が決まり、今後もカオイダンでの生徒数の増加が考えられる。またドライビングコース教習用道路建設がほぼ終了し、現在自動車の到着を待っている。 鍛冶屋コースは教室が完成し、現在3名の先生が演習を開始。くわ、なたなどが試作されている。両コースとも3学期より正式にスタートとなる。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)	Somyot Rattana-tham, Sutthi Netprakhon, 井本勝幸、井本接奈
パナニコム (第三国定住待ち キャンプ)	●日本語学校 8月1日、ベトナム難民44件、48名が日本に出发した。そのためクラス数は3つになる。第2グループのベトナム難民を対象に8月14日～23日に生活オリエンテーションを行った。	IOM	竹村雅義、熊沢ゆり、 岡村達司、蘭牟田浩美、 Chowarite Duangprom
ブリラム県	●農村開発 村人は田植えに忙しい。 深井戸を3つ掘った。 チャブーンでの環境プロジェクトを構想中。	モラロジーMIRC, JOFIC, JVC カレンダー	Komain Soongsu-man Thongkham Sumruengram
ラオス ヴィエンチャン 県 ボーリー・カム サイ県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 第2回養成コースが8月23日に終了した。 第1回養成コースの卒業生はすでに様々な普及活動を地方において展開している。カンムアン県では村人を対象にした母子保健や農業に関するショートトレーニングが、JVCの建設した県の母子センターにおいて行われた。 さらに、トレーニング講師を対象とした第1回東北タイ・スタディーツアーに引き続き、12月には第1回養成コースの卒業生を対象としたツアーを計画している。	UNDP, UNIFEM, 庭野平和財団, NVC, 日産労連, ギャラリーイカット、 聖ヨセフ老人ホーム、 老人ホーム天寿荘、 難民と地球の緑を考える会、 グループ・カン	谷山博史、北詰秋乃、 原田恵津子、 Thanongsi Solankun, (ラオス女性同盟) Khamone Phetdao-heuan, Khamphone Saignavong, ガルー、メサイアコンサート、 JOCV, JVCカレンダー
ベトナム	(南部) 1月と4月の調査に基づきホーチミン第8区とビンチャン郡の障害児教育、病院/保健所の分野でのプログラム改善案を6月のJVC総会に提案し、承認された。 (北部) 香港からベトナム北部への難民自主帰還は7月1日現在3000人を超え、毎月750人が自発的に帰国している。その半数以上がハイフォン市出身の人間であるが、これら帰還難民と一部地元の人々を対象に職業訓練(洋裁、木工、電気、自動車)を計画している。これはUNHCRのプログラムであり、ハイフォン市労働局とJVCが実施する。	庭野平和財団、 UNHCR	熊岡路矢、中野周二、 稲見 圭 Le Thanh Hai Nguyen Trang Thu (UNHCRハノイ) Jacques Mouchet, Erkki Heinonen (ハイフォン市) Trao

JVCの活動とその目的に御理解を

▶ JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶ JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

- 正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)

▶ 機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- 毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- 毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ 送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ① 会員：東京 5-48365 加入者名—JVC会員係
- ② T/E：東京 3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい)

編集後記

▶ 今回の編集作業の課程でリゾート法の勉強をした。今まで、リゾート開発から自然を守ろうとしていた、いくつかの条例、規制が、この法律によって解除され、国をあげての自然破壊が始まった。金に目がくらんだ企業や自治体の犠牲になるのは、常に地元の人々だ。ゴルフやスキーをやるなどは言わないが、地域と問題を起している場所でのプレーは、ボイコットするぐらいの分別がほしいと思う。
(清水)

▶ 102号の座談会「元気な女たちが語る第三世界の女たち」において、誤りが多々あり、関係者の方にご迷惑をおかけいたしました。ここに深くおわびいたします。

(林、柴田、前川)



▶ みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (8月小計 52,397円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金(8月小計 107,390円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金(8月小計 13,508円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンボジア募金 (8月小計 131,500円) カンボジア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (8月小計 34,500円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金(8月小計 57,500円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (8月小計 2,500円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (8月小計 2,500円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (8月小計 21,500円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (8月小計 50,000円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (8月小計 1,856,200円)

▶ 送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京 9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)

加入者名—JVC東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京 0-212497 (8月小計188名 1,717,223円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています

1990年9月20日発行(毎月20日発行)

編集人 谷山博史、清水俊弘、前川昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所

〒113 東京都文京区湯島 3-1-4 会田ビル5階

☎03(834)2388 FAX: 03(835)0519

Telex: 7604025 JVC HQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (助)神奈川県国際交流協会内
☎045(671)7082

印刷所 ㈱ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。